

本学では今夏も国際交流派遣プログラムが実施され、韓国・大邱保健大学およびタイ・コンケン大学での各研修と、Global Student Leadership Program（大邱保健大学）の3プログラムに計20人の学生が参加しました。各プログラムに参加した学生の体験記を3回にわたり紹介します。

国際交流派遣プログラム体験記（上）

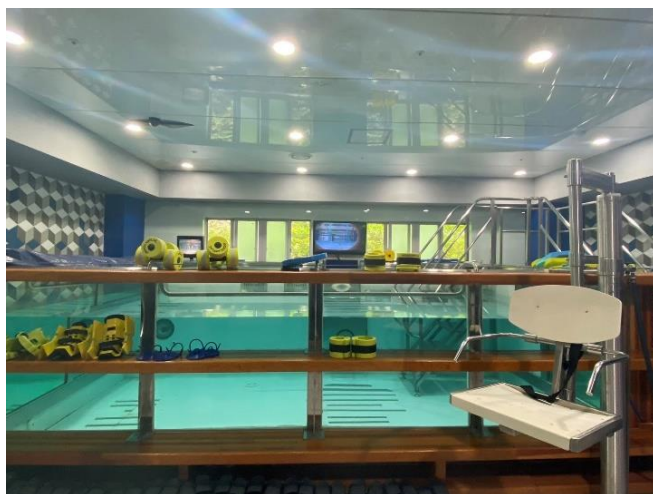
8/14～24 韓国・大邱保健大



言語の壁越え 濃密な時間満喫

理学療法学専攻4年 緒方 萌恵さん

大邱保健大の学生たちと楽しんだ夜のピクニック



「水治療法」を体験したプール

新鮮だった「水治療法」／出会いを通じ広がった視野

大邱保健大学での研修は、楽しい日々の連続でした！10日間に渡り、市内観光や、病院見学など、私的な旅行ではできないことを、多く経験しました。韓国の学生や先生方も優しく接してくださり、言語の壁がある中でも有意義な時間を過ごすことができました。

特に良かった点は、韓国の医療について学ぶことができたことです。まず、大学の講義の一部に参加し、「水治療法」を実際にプールの中に入って経験しました。様々な形のビート板の様な道具を駆使しながら水中で運動するという方法だったのですが、日本では学ばなかったため、新鮮でした。また、韓国の理学療法学の知識は英語名で学習するらしく、筋の名称や身体の運動方向などの説明は英語で行われました。世界のスタンダードとして、基本的な医療言語は英語でも理解しておく必要性を強く感じました。

さらに、韓国の病院を3つほど見学することができました。日本のリハビリテーションとの共通点もあれば、韓国特有な点も見つけることができ、興味深かったです。日本と韓国の方法それぞれにメリットがあり、日本の病院だけを知っていた時よりも、自身の視野が広がりました。今回、韓国のリハビリテーションについて学んだだけでも、多くの驚きがありました。日本のリハビリテーションの知識を身に付けた後は、日本の知識だけに留まるのではなく、海外の技術にも目を向けてどんどん自身の視野を広げていきたいと思えます。最終学年だからと、諦めずに今回のプログラムに挑戦して、本当に良かったです。

大邱研修のプログラム内外で、韓国のサポート学生が案内をしてくれました。毎日ご飯を一緒に食べたり、休日を共に過ごしたりと、とても濃密な時間を過ごしました。今回の活動を通して得た多くの出会いを今後も大切にしていきたいと思えます。最後に、大邱交換研修を運営してくださった先生方、大邱でお世話になった皆さまに感謝申し上げます。得難い経験をさせていただき本当にありがとうございました。



「アカデミックスキルⅡ」基調講義

果敢な挑戦、プロ意識…熱く語り掛け

1 年次生を対象とした全学必修科目「アカデミックスキルⅡ」の基調講義が1 日（火）と、3 日（木）に50周年記念館で行われ、学科ごとに川口辰哉研究科長、木下統晴理事長、竹屋元裕学長がゲストスピーカーとして登壇しました。基調講義は、学びや将来の進路に対する構えづくり等を狙ったアカデミックスキル授業の根幹をなすものです。

看護学科では川口研究科長が、「キャリアパスを見据える」と題して講話。冒頭、自身の医師としての歩み、米国留学での出会いや経験を紹介した上で、挑戦することの重要性を説きました。また、大学卒業後のキャリア形成について、看護師のほか保健師、助産師、認定看護師など多彩な進路を紹介した後、プロ意識を育むことの大切さを解説。「挑戦するための環境は整えられている、あとは皆さんが飛び込むだけ」とエールを送りました。

リハビリテーション学科を担当した木下統晴理事長は、「医療人の魂」と題して講義。2065年に

は8800万人にまで減少し、高齢化が進展するという日本の人口動態を示した上で、健康寿命の延伸の重要性を解説しました。さらに、医療人の心構えとして、現場主義、一步一步の積み重ね（積小為大）、一人一人が役割をなすこと（一円融合）の大切さを力説。「プロとしてはばたくということに自覚して、残り3 年半の学生生活を過ごしてほしい」と訴えました。

医学検査学科を担当した竹屋元裕学長は、「自分自身のキャリアをどうやって見つけるか」と題して話しました。竹屋学長は米国の心理学者E. シャインの「キャリア理論」を示しながら、北里柴三郎が医学を志すに至った経緯とその後の足跡、自身のこれまでの歩みを紹介しました。その中で、良き師や共同研究者と出会う努力、ロールモデルを見つけることの大切さを説明。「人生とは偶然の連続、どんなに些細な出会いや発見も大切にしてほしい」と熱く語りかけました。

（アカデミックスキル支援センター 松尾健志郎）

私の秘話 ★ ヒストリー



看護学科 熊谷有記教授

思い出の4 コマ漫画

引っ越しをすると、懐かしいものや、思い出の品が、たくさん出てきます。今年から熊本保健科学大学で働くにあたり、何年かぶりの引っ越しをした際にも、懐かしいものが出てきました。その一つが、新人看護師として働き始めたときに、気の向くまま描いた4 コマ漫画です。

4 コマ漫画には、新人看護師時代の失敗談（例えば、アンプルカット時に指をケガないように先輩に教えていただいた直後にケガしたこと）、一緒

に働いた医師のメガネが光り輝いていたこと、自転車にのって信号待ち中に散歩中の犬に足を噛まれたことなど、他愛のない話が記載されていました。そして、漫画の執筆活動時間は、決まって夜であることを思い出しました。慣れない新人看護師の時に、睡眠時間を削って漫画を描いた自分に突っ込みながらも、そんな時もあったのだと懐かしく思いました。

いつか思い出になるこれからの経験も、大切にしていきたいものです。

多彩な内容 堂々と紹介

生活機能療法学専攻 卒研発表会



卒業発表を終え、晴れやかな笑顔を見せる生活機能療法学専攻の4年生たち

リハビリテーション学科生活機能療法学専攻の卒業研究発表会が8日（火）、2号館で開催され4年次生35人が各研究室8グループに分かれ、研究成果を報告しました。

研究内容は認知機能や脳血流動態の変化、作業活動の効果等に着眼した実験研究や介入研究から地域在住高齢者を対象とするような観察研究、文献レビューや倫理・教育に関連する演題と幅が広く、興味深い発表が続きました。本学生生活機能療法学専攻の特色が色濃く出た発表会となったと思います。

今回は2会場での実施となりましたが、どちらの会場でも活発な意見交換が行われ、良き学びの時間になりました。発表後、学生たちはホッとした表情、達成感のある表情など様々な表情を見せてくれました。4年生の皆さん、各研究室での研究活動お疲れ様でした。（リハビリテーション学科生活機能療法学専攻 松尾崇史）

復活 カルタ取り大会

国試突破へ 医学検査学科

医学検査学科では、4年生の国家試験対策の一環として、「秋のカルタ取り大会」を2日（水）、アリーナで行いました。

ルールは簡単です。読み手が国家試験に関する問題を読み上げ、その問題が記載してあるカード（A3サイズの大きいもの！）を取った人に解答権が与えられるというものです。参加した学生は、歓声を上げながら解答権をゲットして、次々と答えていました。正答が多かった学生から1～10位まで順位を決定し、拍手で称えられながら嬉しそうに景品を手にしていました。カルタ取りの前には、準備運動も兼ねて、国家試験の画像問題を○×クイズの形式で出題。4年生が会場内を右に左にと悩みながら移動して解答していました。

実はこのカルタ取り大会は令和元年に第1回を開催したきりで、長らくコロナ禍で実施ができませんでした。しかし、「国家試験の勉強も、どうせやるなら楽しみながら今の努力の成果を実感して欲しい」という教員側の思いと、「先輩たちがやっていたようなことがやりたい」という学生側の思いが合致し、5年ぶりに復活することができました。イベント終了後は「また、したい！」

「楽しかった！」などの声が聞け、勉強しながらいい気分転換にもなったのではないかと思います。この調子で国家試験まで走り抜けて欲しいものです。頑張れ、4年生！

（医学検査学科 田邊香野）



5年ぶりの開催となった医学検査学科の「カルタ取り大会」

銀杏アラカルト

■ 8月期2・3年生保護者会 医学検査学科3年次生、理学療法学専攻2年次生を対象とした保護者会を8月19日（月）～9月30日（月）の期間中、Webオンデマンド形式で開催しました。

2・3年次生の保護者会は、長期実習前に実習の目的と概要、さらにその先にある国家試験・就職・大学院進学について、保護者に情報を届けることを目的としています。冒頭、竹屋元裕学長は「この学年では臨床実習がかなりのウェ

イトを占めており、医療人にとって重要な多くの経験を積む機会となっています。本学では多くの施設に協力していただき、本学の教員と各施設の指導者が協働して臨床実習を行っています」と、実習の目的や意義について語りました。また、希望者に対しては、SG担任との三者面談（希望者のみ）も実施しました。これをもって令和6年度の保護者会をすべて終了しました。

（就職・実習支援課）

助産別科第18期生



会場からの質問に答える助産別科の学生たち

図書館主催の「私の部屋でランチを」が3日（木）、キャンパステラスで開催され、助産別科第18期生の5人が「熊本からオレンジリボンの輪を広げよう」と題して話しました。

学生たちは冒頭、熊本県内で児童虐待に関する通報件数が過去最多という現状や、複雑化する児童虐待の内容について解説。その上で、「多くの方に子ども虐待の問題に関心を持っていただくことが、この上ない虐待防止の後押しとなる」と、オレンジリボン運動推進の必要性を訴えました。

同運動は、子ども虐待防止のシンボルマークとしてオレンジリボンを広め、子ども虐待をなくすことを呼びかける市民運動です。2005年、栃木県小山市の市民団体「カンガルーOYAMA」が開始しました。オレンジ色は、子どもたちの明るい未来をイメージしています。この日は、参加者がオレンジリボンを作成する時間も設けられました。

助産別科第18期生はオレンジリボン運動啓発活動の一環として、19(土)の杏祭で啓発ポスターを配布する予定です。

(NL編集部)



松原 慶吾准教授 (リハビリテーション学科言語聴覚学専攻)

最終年度迎えた「食べること健康チェック」

高齢者に好評 継続望む声も

平成30年度から身体機能を含む「食べること健康チェック」を行い、高齢者の食べる機能に関する研究に取り組んできました。9月27日（金）には、熊本市の上近見地区に住む14人に参加してもらいました。

同地区の方々には、研究開始当初から協力いただいており、今回で4回目の開催です。この研究が今年度で終了となることを伝えると、参加者からは「ぜひ、継続してほしい」、「また大学に来たい」といった声とともに、「ぜひこんな研究をしてください」といった提案もいただきました。参加者からの励ましにも似た言葉をいただき、これまで取り組んできてよかったという気持ちと、この研究を今後も継続したいという気持ちが高まりました。

健康チェックの後、参加者は、本学のレストランで「チキン南蛮定食」「エビフライ定食」などに舌鼓を打ち、帰路につきました。



健康チェックを終え記念撮影する本学スタッフと上近見地区からの参加者たち

インフォメーション

週間行事予定 (10月15日～10月21日)	
10/16 (水)	動物慰霊祭
10/18 (金)	学内インフルエンザ予防接種
10/18 (金)	杏祭【前祭】
10/19 (土)	杏祭【本祭】